

認知言語学から見た英語と日本語の 丁寧表現の一考察

A cognitive linguistic analysis on the differences of the politeness
in English and Japanese

FUJIWARA Masamichi

藤原正道

英語コミュニケーション学科教授

抄録：

本論は認知言語学の観点から、話し手と聞き手、そして認知主体の認知領域でのそれぞれの関係に焦点を当て、英語の丁寧表現と日本語の敬語の違いを明らかにしていく。英語では、認知主体は話し手と聞き手が構成する認知領域から離れた位置に存在している。一方、日本語では話し手と聞き手及び認知主体は、混ざり合うかのように同じ認知領域である「場」を構成している。これらの違いが、英語と日本語それぞれの表現に影響を与えている。

本論では、そのような相違が、英語の丁寧表現や日本語の敬語を用いた待遇表現にも影響を与えていると捉え、それぞれの違いを明らかにする。

Abstract：

In this study, we apply cognitive linguistics to elucidate the cognitive relationships among the speaker, hearer and conceptualizer in English and Japanese when we use polite expressions and elaborate on the differences in the characteristics of the politeness in English and Japanese.

キーワード：英語と日本語の丁寧表現、敬語、認知主体、認知領域、認知言語学

Keywords： Polite expressions in English and Japanese, Keigo, Conceptualizer, Cognitive domain, Cognitive linguistics

1. はじめに

他者への丁寧さを表すために、日本語は敬語を用いるが、現代英語には敬語は存在しない。し

かしながら、英語にも他者への丁寧さを表す表現は存在する。このような両者の違いを分析するための共通の基盤となるのが、Leech (1983) の示した「丁寧さの原理・原則」と考えられる。

「丁寧さの原理・原則」は要約すると、話し手自らが行動し、選択権は聞き手に与え、利益は聞き手が話し手に与えてくれるような表現が丁寧な表現ということになる。英語のみならず、日本語にも当てはまる原理・原則であり、丁寧さを表すのにどのような表現を用いるかは、それぞれの言語による。

丁寧表現の選択に影響を与えているのが、英語と日本語のそれぞれの言語の認知構造である。本論では、英語と日本語の話し手と聞き手、認知主体のそれぞれの関係に焦点を当てた認知構造と丁寧表現の違いを分析していく。

2. 英語と日本語の認知構造

2.1 英語の認知構造

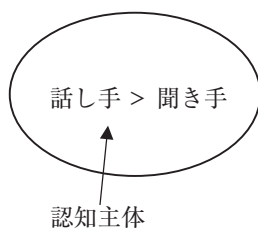
Langacker (2008) や中村 (2019) によると、英語は認知主体が話し手や聞き手の認知領域の外にいて、事態を把握している。次の例を見てみよう。

- (1) a I am happy.
- b Where am I?

(1a) は認知主体である話し手の幸福な感情を表している。日本語話者から見れば、自分自身の感情は話者が一番よく実感しているはずなので、わざわざ「I」を明示する必要を感じない。しかしながら、英語では認知主体が認知の場から離れた外側におり、自らを外から眺めている。つまり、自らを客体化しているように表現している。

(1b) では道に迷っている状況であり、もし聞き手がない独り言の場合でも、「I」が明示される。このことは英語の事態把握の場合、認知主体が直接事態と対峙せず、事態の外側から全体を眺めているかのように認識するからである。このような特徴は、次の (2) のように図示できる¹。

(2)



2.2 日本語の認知構造

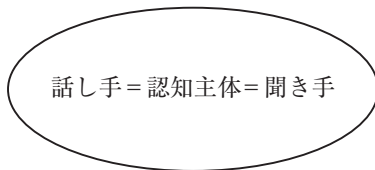
日本語の認知構造は英語と異なり、話し手と認知主体は同じ場所に存在し、加えて、聞き手と

同じ「場」(または「情報のなわ張り」)を形成し、コミュニケーションを行う(井出(2017)、井手・藤井(監編)(2020)、神尾(1990/2002)参照)。つまり、認知主体や聞き手もが背景化されるような事態把握を行っている。「私」や「あなた」がしばしば省略されることや、次の(3b)では主語の省略というよりも、主語を明示すると不自然な表現になることから明らかである。

- (3) a 幸せ♡
b ここはどこ？

(3)は認知主体が明示されずに背景化されており、発話者が自分を客体化することなく、聞き手と同じ言語認知空間を共有しているので、可能な表現と言える(中村(2019)参照)。これらの特徴は(4)のように図示される²。

(4)



日本語では、話し手を主語として明示しなくてもよいのに加えて、聞き手も明示しなくても良い場合があるなどの現象が、このような認知構造をとる証拠となる。

3. 認知構造から見た英語と日本語の丁寧さ

3.1 英語の丁寧表現の認知構造

上記の(2)のように、英語の認知主体は話し手と離れたところに位置しているので、話し手と聞き手が対峙する。したがって、依頼表現の場合、聞き手への負担を減らす為、話し手の責任を表現上明確にすることから始め、次に可能な限り話し手を聞き手から引き離して、話し手の存在を消すかのように表現する。

例えば、下記の(5a)のような直接的な表現よりも *I think/ I'm afraid* などを用いた(5b)の方が話し手の責任が明確になり、より丁寧とされる。さらに(5c)では人称代名詞の「I」を用いず、話し手を明示しないことにより、丁寧さを表わしている。

- (5) a You had better see a doctor.
b I think/ I'm afraid you should see a doctor.
c It seems that you should see a doctor.

これらの例のように、英語の丁寧表現の特徴のひとつは、話者の責任を明確にして、次に話し手の存在を表現上希薄化し、聞き手への負担を減少する。話し手と認知主体が一体化しない英語の認知構造が生かされた丁寧さの表し方と言える。

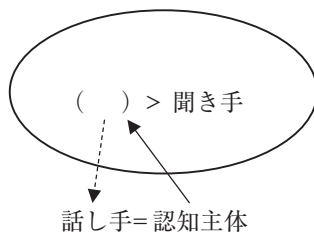
続いて (6b) のように仮定法を使って丁寧さを表す場合、「もし可能だったら」という含意で相手への負担を減らし、あくまで仮定の事態であり、直接的な現実ではない。つまり、話し手は聞き手と対峙していないかのような表現を用いる。

- (6) a Will/ Can you open the door?
- b Would/ Could you open the door?
- c Do you mind if I might ask you to open the door?

(6a) では疑問文を用いることで、聞き手へ選択権を与え、依頼に対する負担を減らしているが、仮定法を用いた (6b) では依頼が消極的になり、聞き手への負担がさらに軽減され、丁寧さがより増加する。(6c) ではさらに間接的表現、疑問文と仮定法との組み合わせにより、聞き手への負担を最小にしながら、話し手は話題の事態や聞き手からさらに距離を取ることができる。

仮定法を用いることで表現上、話し手は依頼事項から一歩退いた位置、聞き手とは別の仮定の認知領域へと移動し、聞き手と直接対峙していないかのようなようである。この特徴は、次の (7) のように図示できる。

(7)



さらに、過去形などの時制を用いて、丁寧さを表すのも英語の特徴である。

- (8) a I wanted to give me some advice.
- b I am hoping you'll give us some advice.
- c I was wondering if you could help me.

(8a) は丁寧さを表すため、あえて過去形を用いている。(8b) も現在進行形で丁寧さを表し、(8c) では過去形と進行形を合わせて、さらに丁寧さを増している。

(8a) の過去形は、話し手の時間軸上の視点 (Reference Point) が現在時から離れ、過去時へ移動する。現在時の依頼を話し手は、聞き手から離れた過去から見た事態のように表現すること

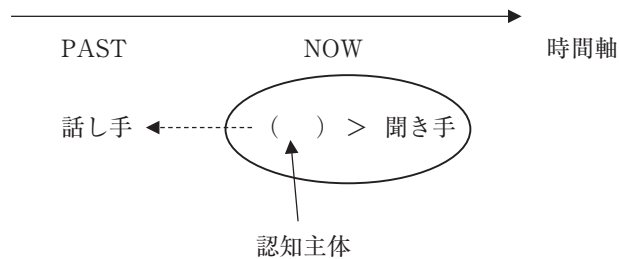
によって、聞き手への負担を減らしている。

一方、(8b) では現在形を用いると、依頼が現在だけでなく、過去や未来へも時間的に広がってしまうような印象になるのでそれを避け、進行形の特徴である他の時間から切り取られたようなその場限りの時間的制限という特徴を利用することで、限定的な依頼であると示し、聞き手への負担を減して丁寧さへとつなげている。

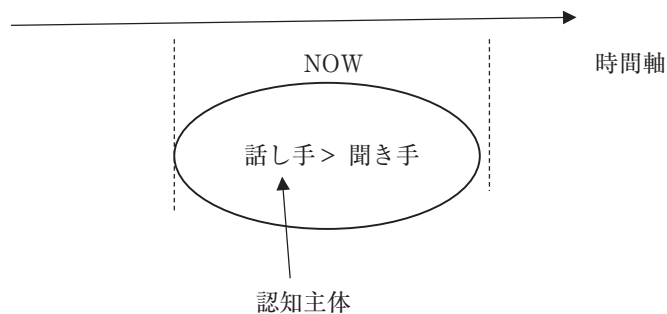
(8c) は過去と進行形を合わせた表現で、話し手は聞き手から離れ、依頼はさらに限定的となる。(8a/b) よりも丁寧な表現になっている。

これらの丁寧表現は、下記の (8') のように図示される。

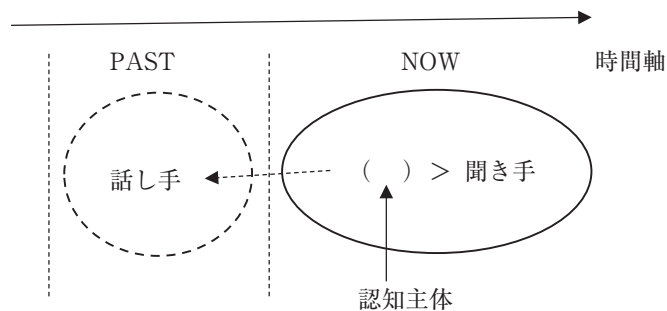
(8') a



b



c

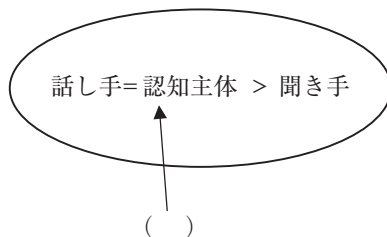


さらに、Leech (1983) の「丁寧さの原理・原則」に従えば、聞き手にとって利益となることが丁寧になるので、直接的な表現、つまり命令形でも丁寧さを表せる場合がある。次の例を考えてみよう。

- (9) a Come in.
b Will/ Can you come in?
c Would/ Could you come in?

外は雨が降っていて体が濡れてしまう相手を気づかう場合、(9b) や (9c) のような表現ではなく、(9a) の命令文を用いて、相手に家に早く入ってもらう方が丁寧である。一般的に命令文では、話し手を表す主語や聞き手の目的語も明示されることはなく、認知主体が話し手と一体化し、聞き手と同一の認知空間に存在する。(10) のような関係になると考えられる。

(10)

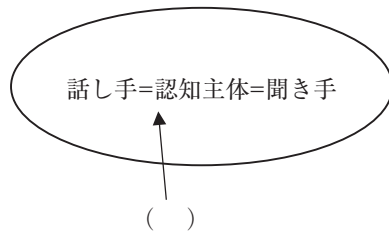


一方で、丁寧さを表す為に YOU ではなく WE を用いる場合がある。(11) よりも (11') の方が話し手が聞き手に寄り添った、つまり話し手が聞き手と一体化することによって、丁寧さを表している。

- (11) a Can you stop for a bite?
b Can you go to the seashore with me?
c Did you take your medicine?
(11') a Let's stop for a bite.
b Why don't we go to the seashore?
c Have we taken our medicine?

この場合の認知構造は、下記の (12) のようになる。

(12)



(12) の認知構造は、日本語の共話の構造に似ている。日本語の場合、元々認知主体も話し手も聞き手も同一視するため、WE (=我々) のような主語を明示する必要もない。しかしながら、英語は認知主体と話し手は、元々別の位置にあるため WE を明示する必要がある³。

3.2 日本語の敬語による待遇表現の認知構造

話し手と聞き手が共同で会話を構成することが、日本語のコミュニケーションの特徴であるとすると、敬意を表す場合は聞き手に焦点を当て、相手を際立たせるか、または話し手やその行動に焦点を当てることで聞き手を際立たせて敬意を示すようである。

上記 (4) のように、話し手は認知主体と一体化して、聞き手とも同一認知空間で会話すると、英語のように話し手と認知主体が離れていないので、聞き手への距離を取ることは不可能である。したがって、話し手 (= 認知主体) と聞き手との上下の位置関係を利用して、敬意を示すことになる⁴。

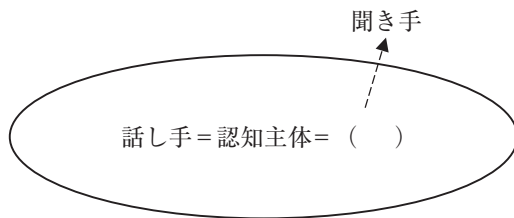
- (13) a 教授が本を貸してくださる。尊敬
 b 教授に本を貸していただく。謙譲
 c 教授に本を貸してもらおう。丁寧

しかしながら、日本語の敬意表現にも、上下ではなく、話し手と聞き手との心理的な距離は大いに関係している。次の (14) の例を考えてみよう。

- (14) a 部長の藤原がよろしくと申しております。
 b 部長の藤原はまもなく参ります。

聞き手が社外の人の場合、日本語では聞き手を話し手のソトと認識し、敬語を用いて敬意を表す。同じ会社に属する部長の場合、話し手にとっては同じ認知領域 (または同じ「情報のなわ張り」) であるウチと認識し、敬語は用いない。一方、ソトの聞き手に対しては、(14) のように「申す」や「参る」等を用いて敬意を表す。これらの特徴は下記の (15) のように図示される。

(15)

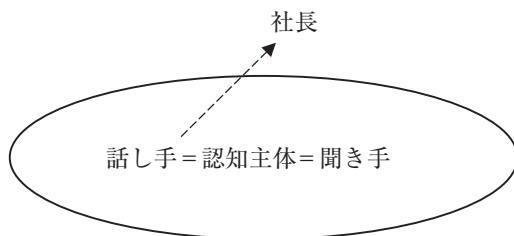


また、英語にはない日本語の特徴として、話題の人物や第三者に対する敬意を表すことができることが挙げられる。

- (16) a 社長がゴルフに行こうって言うんだよ
b 社長がゴルフに行こうっておっしゃるんだよ。

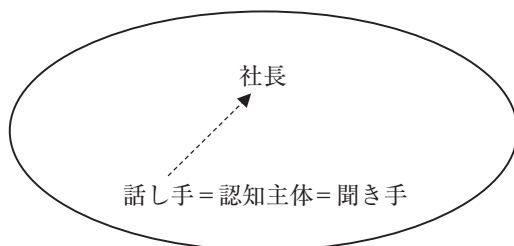
これらは、直接の聞き手ではない社長に対する敬意を表す表現である。聞き手が同じ会社の所属ではない場合、直接の上司ではないので、(16a) のような表現になり、その認知構造は (16'a) のようになる。

(16'a)



聞き手が話し手と同じ会社に所属し、社長には同じように敬意を示すべきだと考えた場合は、(16'b) のような敬語表現になり、(16'b) の認知構造となる⁵。

(16'b)



4. まとめ

本論では認知言語学の観点から、話し手と聞き手、認知主体の関係から英語と日本語の丁寧表現について分析した。

英語では認知主体が別の位置から話し手を見て、話者と聞き手が対峙するという特徴が、それぞれの丁寧表現に生かされている。

話者の責任を明確にしたり、または、話し手の存在を消して聞き手への負担を減らして丁寧さを示している。仮定法を用いて、認知領域から話し手を領域外に出し、聞き手への負担を減少させている。また、過去形を用いる場合も同様に、話し手を時間軸上の会話の現在時から話し手を領域外の過去へと移動させている。加えて、進行形を用いる場合は、当該の事態が時間的に限定的であることを示し、聞き手への負担を減らし丁寧さへとつなげている。

命令形で丁寧さを表す場合には、認知主体が積極的に話し手と同一化し、聞き手へと距離を縮めている。

また、人称代名詞 WE を用いる場合は、話し手と聞き手が一体となって当該の事態に対応するかのような表現になっている。

一方、日本語では認知主体と話し手、聞き手が同一視されるため、聞き手への敬意を示すには専用の敬語を用いて上下関係を示す必要がある。さらに聞き手を同一の認知領域から外すかのような表現を用いて敬意を表している。これらは従来言われているウチ・ソトという概念に通じている。

ところで、現在敬語として「させていただく」が多用されていることが観察されている。現代日本の人間関係はさらなる平等化が進行中だと考えると、「させていただく」や「してもらう」などのように相手との距離や利益の方向への待遇コミュニケーションが進んでいくのかもしれない（蒲谷（2015）、椎名（2017/2021）参照）。今後このような敬語、待遇コミュニケーションの変化についてさらなる調査、研究の継続が必要であると考えられる。

〔注〕

- 1 「>」は、話し手と聞き手が対峙していることを表す。
- 2 「=」は、話し手と聞き手が同一視されていることを表す。
- 3 日本語でも「お薬、飲みましょうね。」のように、自分事のように表現して相手を思いやる表現もある。しかし、主語を明示すると非文となる。「*私たちはお薬、飲みましょうね。」
- 4 敬語については、日本史に基づき封建的身分制度も検討するのが当然であるが、本論は、現代日本語についてのみ分析する。一方で、英語にも Sit down などの話し手と聞き手の上下がある場合にしか使えない表現が英語にもある。
- 5 社会的地位から判断して、一般的に社長には敬意を示すべきだと考えれば、同じ会社の所属ではない場合の聞き手にさえも、(16b) の表現は使用可と判断できる。

〔参考文献〕

- Culpeper, Johnathan and Michal Haugh (2014) *Pragmatics and the English Language*, Red Globe Press. (椎名美智 (監訳) 『新しい語用論の世界：英語からのアプローチ』 研究社).
- 福島直恭 (2013) 『幻想の敬語論 進歩史的敬語史に関する批判的研究』 笠間書院.

- 井出祥子 (2017) 「敬意表現と日本文化「場の考え」からのアプローチ」『日本語学』Vol. 36-6, 2-8, 明治書院.
- 井出祥子・藤井洋子 (監編) (2020) 『場と言葉の諸相』ひつじ書房.
- 池上嘉彦・山梨正明 (編) 『認知言語学Ⅱ』ひつじ書房.
- 蒲谷 宏 (2013) 『待遇コミュニケーション』大修館書店.
- 蒲谷 宏 (2015) 『敬語だけじゃない敬語表現：心づかいと思いやりを伝える「丁寧さ」』大修館書店.
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論 言語の機能的分析』大修館書店.
- 神尾昭雄 (2002) 『統 情報のなわ張り理論』大修館書店.
- 加藤重広・滝浦真人 (編) (2017) 『日本語語用論フォーラム 2』ひつじ書房.
- 加藤重広・滝浦真人 (編) (2020) 『日本語語用論フォーラム 3』ひつじ書房.
- 児玉一宏・小山哲春 (編) (2021) 『認知言語学の最前線』ひつじ書房.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press.
- Leech, Geoffrey (1983) *Principle of Pragmatics*, Longman (池上&河上 (訳) 『語用論』紀ノ国屋).
- Leech, Geoffrey (2014) *The Pragmatics of Politeness*, Oxford university Press.
- 森 勇太 (2016) 『発話行為から見た日本語授受表現の歴史的研究』ひつじ書房.
- 中村芳久 (2019) 『認知文法研究：主観性の言語学』くろしお出版.
- 椎名美智 (2017) 「「させていただく」という問題系」加藤重広 & 滝浦真人 (編) 『日本語語用論フォーラム 2』75-105, ひつじ書房.
- 椎名美智 (2021) 「「させていただく」の語用論：人はなぜ使いたくなるのか」ひつじ書房.
- 高見健一・加藤絃三 (2003) 「受益表現と話し手の視点 1-6」『言語』大修館書店.
- 滝浦真人 (2020) 「「ポライトネスの原理・原則」と日本語ベネファクティブの敬意漸減」加藤重広 & 滝浦真人 (編) 『日本語語用論フォーラム 3』75-104, ひつじ書房.
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現：日本語語用論入門』明治書院.